

# キリスト教福祉論の基盤

## —— 福音の神学の視点から ——

今 関 公 雄

〔キーワード〕 キリスト教福祉論，福音の神学，  
聖書の救済史観，神の国，神の家族

### はじめに

筆者は、キリスト教と社会福祉の関係について長年考えてきている。また、このテーマに関連する授業を担当する機会も得ている。社会福祉が、時代の要請でますますその重要性を増してきている今日、何が真に大切にされるべきかについて、その核心とそれを支える基盤を明らかにする必要性を覚えている。そこで、標記の論考により若干の試論を提示したい。

### 1. 福祉観を貫く聖書の救済史観

福祉の営みには、いわば目に見える福祉としての市民的自立欠如者への直接的な援助活動がある。あわせて、この援助活動を包含しつつそれが志向する共同体像や社会像を求めるところの目に見えない福祉もある。したがって、福祉観を考えるとときには福祉の対象者（被援助者）を中心に、その共同体や社会がどのような福祉理解に立脚しているかが、肝心といえる。おそらくこの理解と成熟がその社会全体の福祉観を現わすと考えられる。

ここでは、福祉の対象者理解とその援助態度、それに影響を与える福祉共同体の認識について、聖書の救済史観を手掛かりにその概要を見ておく。

キリスト教会の正典として、旧約 39 巻・新約 27 巻からなる聖書（バイブル）がある。云うまでもなく、その神学や伝統により多様な考え方がそこには存在し

ている。ただ聖書を貫く大方の歴史認識として、救済史観が与えられている。そしてその概要は、次の流れで理解される。それは、神による天地万物の創造にはじまり、人間の墮罪物語、族長の信仰、イスラエル民族の存亡物語、預言者によるメシア予言、救い主イエスキリストの誕生、イエスによる福音の宣教、キリストの十字架の贖罪、復活、昇天、主の日の來臨の希望、終末における神の国の完成、でおわる。

## 2. 福祉の対象者理解と聖書の創造物語

人間が何者として創造されたかは、福祉の対象者理解の根底をなすものとして位置づけられる。したがって、旧約聖書の創世記に記述された人間の創造物語は、それが神話的表現をとってはいるが人間の本質を鋭く突いている。その核心は、「人間が神の似姿に創造された」ところにある。つまり、神と応答関係をもつ人格存在として形造られたのである。創世記1:27では、次のように記されている。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」

したがってここでは、障害者や高齢者、病者など市民的自立能力欠如者として福祉の対象者になる人においても、その本質的な存在基盤が神の被造物としての神の子であることを示している。このことは、この世的な能力価値の評価の前に、聖書の創造物語における神の子としての存在価値が優先していることを示している。ここに聖書の救済史観に基づく人間の尊厳の基盤がある。このようにして、全ての人が神の共同体の一員として位置づけられる。どんなに重度の障害者や病者であっても、一人として洩れることはないのである。

## 3. 福音としての神の国・神の家族

イエスの福音宣教の第一声は、次のごとくであった。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1:14)。また主の祈りにも、「御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。」(マタイ6:10)とある。さらに、新共同訳聖書の小見出しでは、「迷い出た羊」

のたとえ、と記されている次の個所は直接「神の国・神の家族」の表現はないが、この標題の真意に最も接近していると考えられる。「あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言うておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。」(マタイ 18:12~14)

このように、聖書に記された神の国や神の家族の関連聖句には意義深いものがある。ここで確認したいことは、やはり最後の一人も洩らさない、つまり切り捨てないということである。そこで次に、この系譜の福祉実践に着目して見る。

#### 4. 福祉実践から見る神の国・神の家族

##### (1) マザーテレサと死を待つ人の家

マザーテレサ(修道女、1910~1997)とその創設になる「神の愛の宣教者修道会」の人々による愛の実践活動は、私たちに多大の励ましと教訓を投げかけている。特に、「死を待つ人の家」の取組みは、福祉の原点を指し示していると考えられる。明日、または明後日死ぬかもしれない路上の行き倒れの人に最大限の援助の手を差し伸べる。そして多くの場合、その最期を手厚く看取るのである。その働きは、この世的に考えれば無駄な努力に見え徒労にも等しいと思える。しかし、彼女たちは黙々とその取組みを喜んで絶えることなく続ける。

このような行動はどうして可能なのであろうか。私の乏しい理解では次のように整理される。その核心部分は、路上の行き倒れ人に「貴方も神さまに愛されていますよ」と伝えないではいられない人間観をもっているのである。さらに、その路上の行き倒れ人こそが、あの十字架上で贖罪死を引き受けられた主イエスの再来と捉える信仰観がその援助活動の関わりを支えているのである。

これらの根拠となる聖句は、おおよそ次にあると考えられる。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びな

いで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ福音書 3:16),「そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」(ヨハネ福音書 25:40)

マザーテレサは、自分たちのこのような働きについて問われたとき、しばしば次のように応答する。私たちの働きは、「大海の一滴」に過ぎないかもしれませんが、しかし「この一滴」がなければ「大海」はないのです。したがって、路上の行き倒れ人という一滴も、またわたしたちの小さな援助活動である一滴も、これを欠いて大海(この世界)は成り立たないとの揺ぎ無い信念が全てを貫いているのである。

このように見てくると、彼女たちの援助活動の本質は信仰行為であり、いわゆる慈善的で人道的なものとは異質でさえある。その点では、私たちの考える福祉援助活動とは言えないといわざるを得ない。しかし、大海の一滴の信念に示された「最後の一人」を切り捨てない、外さない、否むしろ「この最も小さい者」をこそ最大限に尊重する点に、福祉の原点があることを示しているのである。そして、直接的に神の国・神の家族との表現は見られないが、神が「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人」と呼びかける対象者認識をもつことにおいて、またそのような援助活動を展開している点で、その福祉共同体の輪郭は神の国・神の家族にあると考えられるのである。

## (2) ベーテルでのナチス安楽死政策への抵抗

先の第二次世界大戦下、とくにドイツにおいてナチス・ドイツ(国家社会主義ドイツ労働党)の安楽死政策により、ユダヤ人が約 600 万人虐殺された。実は最近、その背後で重度の障害者・病者が約 20 万人殺害されたことが明らかになってきている。しかもその真相はユダヤ人殺害のいわば先行的な実験台にされたとのことである。

ヒトラーが戦争を開始した 1939 年から 40 年にかけて、「生きる価値のない生命の除去」を掲げた安楽死作戦が展開された。ヒトラーが出した命令は次のよう

なものであった。「一部の公式認定医の権限を拡大させ、慎重な診断の結果不治と判断された患者を安楽死させることができるようにする。」、このようにして、まず療養中の身体障害者たちが、毒を混入した食物や注射で処分された。不治のレッテルをおされた者は、7～8カ所の抹殺を執行する施設に送り込まれ、最後は殺人工場も出現し、ガス室で殺したとのことである。

ベーテル（神の家の意・創世記 28 章他・ドイツ国・ビーレフェルト市にある約五千人の重度障害者・患者と約五千人の職員からなる福祉共同体、医療・福祉・教育の総合施設群で福祉の街を形成）の施設長（牧師）や職員は、この自然科学万能の人種的・生物学的な社会淘汰（進化）論に敢然と戦った。つまり、ドイツ民族の中の「劣等分子」とされた重度障害者・病者を除去することで、「品種改良」を図るとのナチスの優生思想に基づく安楽死作戦に文字通り体を張って抵抗したのである。その根本の信念は次の点にある。「どんな重症の障害者や患者も神から付与された＜固有の人格＞をもち、独自の精神的な活動をしており、＜生きるに値しない生命＞などは存在しない。人間の生命は＜神の賜物＞であり、何人も＜これを侵すこと＞はできないのである。」このようにして、ベーテルの重度障害者・病者をナチスの魔の手から守り抜いたのである。

筆者は、ベーテルで研修中の 1996 年 9 月 20 日、ナチスの優生思想や安楽死政策の研究者であるベナード博士（ベーテル神学大学教授）に次のような質問をする機会を得た。「ナチス安楽死作戦がベーテルに押し寄せてきた際、施設長はじめ職員たちは、何を信念として戦い抜いたとお考えですか？」

するとベナード博士は、次の点を指摘された。根本的には、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」（マタイ 25：40）の聖書信仰に命をかけた行為と考えている。つまり、重度障害者・病者など最も小さい者（弱者）の殺害をナチス安楽死作戦の手に許すことは、救い主なる＜十字架のイエス＞を再び殺す（十字架につける）ことになる。主イエスを真に愛しこれに仕える者は、信仰対象である主イエスを再び十字

架につけてはならず、自分の命を賭けても重度障害者・病者を守り抜く信仰的信念に支えられていたと考えているとの見解であった。

ここで私見を含め若干の補足を加えて解釈すると次のように考えることができよう。神の子イエスは、何故＜十字架の死＞を遂げたのか。それは、私たち全ての者が、一人残らず神の子として回復するために、最も仕える姿として最も弱く・貧しく・悲惨な十字架の贖罪死を自ら引き受けられたのである。したがって、重度障害者・病者の人々は、神の目から見れば最も神に近い人として十字架の主イエスを象徴しているとも考えることができるのである。この主イエスご自身が、この最も小さい者を「わたしの兄弟」として、この一人にしたのは「わたしにしてくれたことなのである」と言われる以上、主イエスの救いにより神の子とされた信仰的確信をもつ者は、重度障害者・病者を見捨てることなくこれと運命を共にする意味において、その命を守り抜く信仰的闘いへと立ち上がることが出来たと考えられるのである。

このように見てくると、ベートルの福祉実践もその施設名＜神の家＞に基づいた神の国・神の家の系譜で捉えることができよう。その核心は、最後の一人を切り捨てず、これと運命を共にして連帯するところにある。

### (3) ジャン・バニエとラルシュの世界

1964年にジャン・バニエ（哲学者・神学者、1928～）が、パリ近郊の小さな町で二人の知的障害者と共同生活を始めたラルシュ（フランス語で箱舟の意・創世記のノアの箱舟に由来）と呼ばれる知的障害者ホームの取組みは、その後共感を得て全世界に広がり100か所に近いという。ここでは、ラルシュを推進させている根本思想に眼を留めたい。そこで彼の近著『ラルシュのこころ』から関連箇所を拾い挙げてみる。

・ 私たちの社会は、知的ハンディを持つ人を、自然の「失敗作」、人間「以下のもの」としてとらえがちです。ハンディを持つ人たちの愛の力は、私たちに人間らしさを気づかせてくれます。この人たちと生きるのは、時として難しく思わ

れるものです。しかし、このコミュニティーの生活が、私たちを変え、本質的なものを見いださせてくれます。私たちは、弱い人を援助しようとしします。しかし、しばらくすると、その人たちが、私たちを助けてくれていると気づきはじめるのです。

- ・ラルシュはトマ・フィリップ神父を通して聖霊によって起こされました。人間の本質は知識にあるのではなく愛にあることを、私たちの時代の人たちに知らせるためです。このために、知的ハンディで苦しんでいる人を通して、彼らの弱さ、単純さ、心を神はもちいられ、特別な仕方でご自分を示そうと望まれたのです。

- ・イエスは、裁いたり断罪したりするために来られたのではありませんでした。そうではなく、散らされている神のすべての子どもを集めに来られたのです。金持ちと貧しい人を隔てている壁、健康な人と病気の人、あるいはハンディを持つ人との壁を壊しに来られました。みなが和解し、同じ(神の)一つの「からだ」の中で自分の場を見いだすためです。

- ・イエスは社会からはずされた人、飢え渴いている人、裸の人、病人、囚われの人、変わっていると思われてしまう人を、ご自分と同じだとみなされます。そして言われます。「私の兄弟であるこの最も小さな者の一人にしたのは、すべてわたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25:40)。そこに信仰の真の秘儀があります。

貧しい人は、ご自分と同じだと、イエスは言われますが、このことは福音の最も大きく、最も理解しにくい秘儀の一つとして残っています。偉大なお方、美であり、力強い神が、いかにして、最も小さくこの上なく苦しむ人、最も弱い人になれるのでしょうか。しかし、愛の論理は、理性や、力の論理とは別のものです。愛するとは、相手の領域に身をおくことです。神は、私たちが恐れないう、私たちと一つになる愛の交わりができるように、ご自分を小さくされました。

「み言葉は肉となった」。これは私たちの内の最も尊いものを、私たちに示すためでした。つまり私たちの傷つきやすい心、愛されたい渴き、愛する力、慈しみ深いこと、命を与えることを、最も素晴らしいことだと示すためでした。弱い人は愛に渴き、愛が必要だと叫んで、「親しく一つになる交わり」へとうながして

くれるのです。イエスが弱い人と、自分を同一にするのはそのためです。

- ・ 神は、精神的病を持つ人、弱い人、軽んじられる人を選ばれたと、パウロがいう時、あるいは、マタイによる福音書の中で、イエスが、神の王国は婚宴のようなもので、そこには貧しい人、物乞い、足の不自由な人、弱者が招かれると叙述する時、この二つの記事は、神の心の中に、貧しい人のための特別に備えられた場があることを確証しています。見捨てられ、軽蔑されたイエスは、彼らと同一のものとされています。旧約の秩序をひっくり返す福音の新しい秩序が、ここにあるのではないのでしょうか。

- ・ イエスのなさる働きは偏見とか恐れの壁を取り壊すことです。その壁はハンディを持つ人と持たない人とを分離させています。そこで、人々を一つの体に結び付けようとなさるのです。強い人、権力、特権を持つ人は高く、一方、小さく、弱く、貧しい人は下だという階級的な社会を覆そうとします。すべてが覆される事態に直面することになります。一番うしろの者が、イエスの制定される「からだ」の中心になります。そこでは、もはや競争はありません。各々の人が、一つの場を持つのです。何人も人の上に位置するということは、もはやありません。それぞれの人は異なっていますが、いなければならない大切な人です。コリントの信徒への最初の手紙（Ⅰコリ：12章）の中で、この「からだ」は教会であり、キリスト教の各コミュニティであって、そこでは、各々の人に、特別な役割があることを述べています。

「ほかよりも弱く、そしてほかより見栄えがしない部分」、隠している者と言われる時、あるいは、同じこの手紙の最初のところで「愚かな者、弱い人、軽蔑された人」というくだりがありますが、私たちは、パウロが誰について言っているのか分かりません。しかし知的ハンディを持つ人は、この規準に完全に当てはまります。歴史の中で、これまで、しばしば、そのような人を隠してきました。パウロはその人たちが、全体として「からだ」に必要で、より見栄えの良いもので覆われなければならないと断言します。そういう人たちは大切な人であり、私たちのコミュニティや教会において果たすべき役割があります。ラルシュは弱



い人と強い人が一つになる「からだ」でありたいと望んでいます。

- ・ イエスはへりくだる道を選ばれました。この道は貧しく孤立した人と出会い、その人たちと一つになって、親しく交われるよう導いてくれます。イエスと出会い、信頼と信仰が生まれ、そこを通して、解放されます。イエスに信頼し、イエスが生きられたように、またイエスと「一つになる心の交わり」に生きるよう努めれば、徐々に恐れや利己主義のさまざまな力から解放されていくでしょう。そうでなければ、こういった力は、私たちの中にあって、私たちをいつまでも支配し続けます。

イエスは、この降りる道に従うようにと、弟子たちに呼びかけています。「高ぶるものは低くされ、へりくだる者は高められる」(ルカ 14:11)。これはイエスに従うようにという呼びかけであり、最も貧しい兄弟、姉妹、最後の席にいる人たちの中に、イエスを見いだすことを意味しているのです。彼らと同じ食卓で一緒に食事をとることです。彼らに自分の心を開き、彼らと「親しく一つになる交わり」に入ることです。このためにイエスは、私たちの石の心を肉の心に変えるようにと、聖霊を送ってくださいます。新しい力が、私たちの弱さの中で現れるよう、イエスはその力を与えてくださいます。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(IIコリント 12:9) のです。

- ・ ラルシュが、メンバーの一人一人にとって、人間的、靈的に必要なことが何であるかと心に向けるよう努めてきた結果、神による一致の計画の中に徐々に導かれて行きました。すなわち全人類の一致、あらゆるキリスト者の一致です。イエスが渴き望まれることは、御父とイエスが一つであるように、全ての人が一つであることでした。圧力や、憎しみ、戦争などから生まれる分離は、神の心を傷つけます。ハンディで苦しんでいる人は、迎え入れ、和解、ゆるしといった一致への道を私たちに示してくれます。

ラルシュがイスラム教や、ヒンズー教の地で生まれたとき、ハンディを持つ子どもの前で母親の苦しみと涙は、宗教が何であろうとも同じだと私は感じまし

た。私たちはともに人類なのです。私たちは皆、神の民です。私たち皆、心が傷つきやすい者です。それで、愛されたり愛したりすることができます。私たち皆、自分自身に囚われている牢から徐々に自由になって、愛において成長できます。

・ み言葉は肉となりました。私たちの一人となり、神性の栄光を隠されました。私たちの欲求、特に愛されたいという欲求を分かち合ってくれました。また苦しみも分かち合ってくれました。貧しくなられたのです。降り、裸になる道を選ばれました。「一つになる親しい交わり」という愛の道を示すためです。

#### (4) 共働学舎の世界

信州共働学舎は、1973年に宮嶋真一郎氏（元自由学園教師、1922～）により長野県北安曇郡小谷村立屋で創設され、今日もお色々なハンディを抱える人々との共同生活を続けている。いのちを育む立場とメンバーたちの自立のため、農業を中心とした生産活動によりほぼ自給自足の体制をとっている。メンバーの規模は、共同生活が無理なくできるよう約20名以内に止めている。

この共同体は、キリスト教信仰とその精神で運営・維持されている。筆者はこの所でかなりの実体験の機会を与えられている。そしてその基本理念が「神の家族」にあると学んでいる。以下に、「共働学舎の構想」と記されたパンフレットにより、本論との関連における見解や思想などを概観しておく。

まず冒頭に掲載された聖句が学舎の全てを包括し貫いていると考えることができよう。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」(ロマ書八章)、「からだは一つの肢体だけではなく、多くのものからできている。－からだのうちで他よりも弱く見える肢体が、かえって必要なのである。－それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互いにいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりひとりはその肢体である。」(コリント第一の書十二章)

・共働学舎とは何かーその願いー

「競争社会ではなく協力社会を」

いまの社会がこれでよいと思っている人は少ないと思います。それではどこに問題があるのか、熱心に考えざるを得ません。個人の考えやあり方には相違があっても、社会全体としては競争社会であることが根本的な問題であると思います。人生の目的や価値の基準が競争原理に基づいている場合が多くあります。競争がなくては進歩はないと考える傾向が強くなります。

そして競争社会は当然勝者優先となり、勝者がすぐれた人であり、勝てない人は駄目な人、役に立たない人と思われ、知らず識らずのうちに差別と不公平の意識が生じます。これは何でも点数で評価して順位をつけなくては決着がつかなくなっている学校教育にも大きな原因があると思います。教育基本法に人格、人権の平等が唱えられていても、ものわりの悪い子供、要領も能率も悪い子供、勝負に弱い子供、規格に合わない子供、肉体的精神的に先天的疾患あるいは弱点を持っている子供は、どうしても重んぜられないのが普通になっています。

その上、家庭を失ったり、親が子供を育む力が十分ない場合は、尚更のこと子供の困惑と不安は増大し、登校拒否や非行にはしるようになることは容易にうなづけます。まして体が不自由であったり、智慧おくれなどと言われて、本来弱者の立場を余儀なくされている人達が、競争のできる人達よりも大切にされるということは、教育の世界にすらありません。彼らははじめから特殊児童として、同情はされても程度の低い人間として扱われるのが現状です。

日本の社会では身体の不自由な人にごく自然に手を貸し、その行動を優先的にすることが、まだまだ普通のことではありません。社会全体が余りに能率や効果のみを重んじ、人間そのものを深く見る余裕を失っている結果だだと思います。教育の目的や体制がこの競争社会で有力に生きる人間を育てることに偏っている以上、自分の名誉や利益を第一とし、形式的資格や見栄を重んずる人間は多く生まれても、他を重んじ、他と協力して生きようとする人間はなかなか生まれてきません。

しかもごく少数の高い能力を持つ人間を出すための教課課程にしばられてい

る現在の学校教育では、人間性豊かな愛深い人間が育つ可能性はありません。いわゆる弱者の上に強者が乗って造られているのが、日本の現代社会のように思われます。多様である故に一致するときにこそ価値がある人間の生命を、可能性を見出しつつ育てるところに使命をもつべき教育が、そのあるべき姿から離れて全く別の方向に走り続けているいまの社会は、国の内外でそのうちに取返しのつかない結果を必ず生じることを憂います。

共働学舎は、今の社会通念となっている点数によって評価される価値観ではなく、人間一人一人に必ず与えられていると信ずる固有の命の価値を重んじ、互いに協力することによって、個ではできない更に価値のある社会を造ろうと願うものです。

・ 真の平和社会を求めて

物質が造り出す豊かさがかえって人間を滅ぼすことになるということは、人類の歴史が証明している明らかな事実です。そもそも文明が進む程に、何故に病気や障害が増えてゆくのか。それが、人類全体を墮落させないための、見えざる神の経緯であるという逆説を深く理解する時に、身代わりとなって重荷を負うこの人々を疎外するのではなく、むしろこれを尊び、その個々の中に秘められた神性を学びつつ、共に生きる社会をつくることが私達の究極の願いであり、生きる目的ではないかと考えます。

政治体制がどんなに変革されても、心の中に真の価値についての革命がおこらぬ限り、社会は根本的に改善されないと信じます。

力対力、報復に次ぐ報復でどんなにバランスをとろうとしても、競争原理を捨て、真理に基づく新たな原理に立つ人類の生き方を実現しない限り、真の世界の平和はあり得ません。人間がこの世に生まれ生きてゆくのは、自己中心に自分さえよければそれでよいのではなく、他を愛し共に生きるためであることは間違いありません。競争の結果、物質的豊かさを喜ぶ反面、愛の乏しくなってゆく悲しさを味わうようになります。

人間一人一人は、調和ある真の平和社会をつくるために、誰もが必要な存在と

して造られているのだと信じます。私達は、競争社会よりも愛による協力社会の方が、個人としても社会としても豊かになり得ることを信じます。そして、人格と人権とが神の前にすべて平等であることを信ずる時に、はじめてそれが可能となることを、日常の生活の中にまず実証しなくてはなりません。

人間はすべて神の作品であると信じます。神の作品には失敗作はありません。一つとして捨てられてよい不良作品は無いはずです。造り主は自らの作品を愛します。その一つ一つに完全者の性質が分け与えられていると信ずるならば、どうしてこれを互いに傷つけ、或いは無視することが出来るのでしょうか。互いにこれを尊び喜び、その組み合わせをよくするために熱心に工夫し努力することが、よい社会（神の完全性に近づく）を造る原動力になると信じます。

共働学舎は、この願いと祈りをもって始められた、独立自活を目指す教育社会、福祉集団、農業家族です。

#### (5) A 施設反対運動の実体験から

―多数の福祉と一人の福祉を相互止揚する学びとして―

1985年夏に開設されたA児童養護施設のいわゆる施設開設反対運動と、そこから気づかされた福祉課題については、筆者は既に小論「福祉の豊かさの一考察」に纏めてある。実は、その開設反対運動が最高潮にさしかかった際、筆者（施設長）は町議会の反対運動のリーダー（ここではB氏と記す）と二回にわたり長時間の大論争となった。そして、今にして思えば此処には福祉の核心が隠されていると、感慨を覚えつつ確認している。本論との関連において、その間の論理と結論を思い起こしつつ記述しておく。

B氏の論理。「A施設を必要としている30名の親と一緒に暮らせない子どもたちには、同情する。しかし、数年前に町外から来た僅か2名の転入生(中学生)により、この穏やかな町の教育環境は極度に悪化した。施設の30名の悪い子どもたちでは、もっと悪影響が予想される。自分たちは、二千数百名の子どもたちの教育環境を守る使命がある。何処か他の所で開設して欲しい。」

筆者（施設長）の論理。「子どもたちが児童養護施設を必要としない時代の来ることを願う。しかし、A 施設を、親と一緒に暮らせないために第二の実家として、最後の頼みの綱としてここを必要とする子どもが一人でもいる限り、私は文字通り命を賭けて施設を開設する。」

B 氏の主張通り時期的には、二名の転入中学生により町で唯一の中学校の教育環境が極度に悪化し、ようやく沈静化した所に A 施設の開設がタイミング悪くぶつかったのである。また、児童養護施設の子どもたちへの偏見や危険視が、先の転入中学生の件と重なり合い地元では過度の恐怖感を持つことになったと推察される。

ただ事の本質は、多数の福祉（利益）の前には一人（少数）の福祉（利益）は、遠慮すべきとの悪しき多数決原則がそこに潜んでいると考えられる。つまり、二千数百人に及ぶ子どもたちの現状の教育環境を保守するためには、外部からの少数で異質な施設児（三十名）などは排除する論理である。あわせて、昔から地縁血縁で村落共同体を形成しよそ者には違和感をもつ風土が根底にあり、ましておや自分たちの子どもたちが、A 施設を必要とするなどとは到底考えも及ばなかったのである（事実としては五年目に地元の二名の兄弟をお預かりした）。

前掲の小論で論述しているところであるが、福祉の本質には「多様性」と「相互止揚性」が包含されており、A 施設開設とその後二十年の歩みを通じてその感を一層強くしている。つまり、児童養護施設（児）というこれまでの町にとっては異質な集団を包含することで、結果的に多様性を豊かにもつ地域社会に変容することとなったのである。あわせて、A 施設という福祉の専門機関を仲立ちにして、旧来の均質的な地域共同体が多様性を含みつつ、お互いに高め合うことになったのである。

また筆者は、その当時の施設の機関紙に一文を寄稿している。難産の開設を経て入所してきた子どもたちへの想いの一端と本論への基本理念として供したい。

「子どもたちよ—光の子・第11号, 1987. 3.1—」

子どもは親を選ぶことはできない。もちろん親もまた子どもを選べない。日本で生まれることや、男であり女であることも自分の思いを超えた秘事である。或る人は自分の出生を手放して喜ぶかも知れないし、ある人は自分の生い立ちを悲しむかも知れない。それにしても、人はそのおかれた現実から出発する以外に道はない。

「子どもたちよ」, 君たちは今や光の子どもの家の子どもである。おそらく、その小さな身体で大人や社会の矛盾を背負い、その意味を充分に知ることもなくここへ入所してきたことであろう。

私は、君たちの入所のときに流した涙を決して忘れない。故あって子どもを委託した親御さんたちの流した涙とその心中をも。養護施設は、このような子どものそして親たちの悲痛な涙と苦悩をしっかりと受けとめ、共有し、共苦するところから出発し、苦悩を超克し、悲しみから喜びへ付与された課題を訓練に変えて、自らの生を感謝へと変容させる任務を社会的に委託されているのである。

子どもたちよ、君たちは今やこの家の掛けがえのない一員である。ひとり一人異なる家庭の事情を負っており、自分の力に余ることもあろうが、既に仲間なのだ。過去の問題は一先ず置いて、今することを為し、これからを拓くことが大切なのである。

君たちは、幾つかの課題を克服しなければならない。自分らしさを失わずによりよく育ち、社会的な自立をめざすことである。そのことが、きっと君たちを魅力的に成長させるだろう。これは、光の子どもの家で育つ君たちに限ったことではないのである。

私たちの責任担当による家庭的養育のネライを説明すると、職員一人が五名以下の子どもを担当し、疑似家族を構成することに意味を持つのである。それは、人間関係の濃度を高めるところにある。そして、安定した生活のなかで真性の家族とともに、血縁のみではつくれない関係を期待するのである。食事を作り、入浴、就寝など、文字通り寝食をともにしてする養育は、君たちの幾つかの課題の克服を＜ともにする＞ことでたすけになるだろう。

(50)

光の子どもの家は、どんな小さな者をも、神は等しく愛の中に入れて掛け替えない者として下さった故に、皆神の家族であると考えるのである。この世の、適者生存・優勝劣敗を基準とする勝ち残り競争を私たちは生き方の基準とはしないのである。

養護施設もまた、小さな社会といえよう。ここでは、神の家族として、最も弱く、いと小さき者が最も尊重されるよう配慮したいと願っている。それは、その時はじめて家族全員が大切にされることになるからである。

神の家族としての子どもたちよ、どうか隣人と共感共苦し、育ちあい、神の愛に応える人となれ！

## 5. 国際障害者年に当たっての《声明》より

1981年1月22日付けで、日本キリスト教協議会(NCC)「常議員会」・「障害者と教会問題委員会」から、標記の声明が出された。特にその中の「聖書に基づく障害者理解と教会の役割」の見解は、本論で論考する大きな動機ともなっている。したがって、福音の神学と福祉の基盤を示唆していると考えられる視点に絞り、次に引用しておく。

聖書が伝える福音は、神がすべての人間を被造物として愛しておられること(創世記1:27)、さらに神は御子イエス・キリストを人間の低さにまで送られたこと(ピリピ人への手紙2:6以下)を宣言している。キリストはかいばおけに生まれ、十字架上に死の苦しみを味わわれるまで、「他人を救ったが自分自身を救うことができない」(マルコによる福音書15:31)弱さを御自身のものとされた。

こうしてキリストは、弱さを負う人間の兄弟として、友としていつも共にいてくださるのである。それは、私たちが能力本位、業績本位の人間観から解放され、すべての人が人間の弱さについて正直になり、各自に与えられた賜物に応じて互いに助け合うためであり、そのようにして共に生きる者となるためである(コリント人への第一の手紙12~13、ガラテヤ人への手紙6:2、エペソ人への手紙



4：16)。

これらのことを正しく認めるならば、私たちは障害者が教会に共にあることの意味を確信と感謝をもって理解することができる。障害者の存在は、弱さの中にあるすべての人間に対する神の恵みを証している。またそれは、私たちすべての者が神の家族の一員として、弱さの故に一つにされ、共に助け合うように結ばれていることを示している。

教会はこのような理解に立ち、障害者も共にある教会になることによって、世の価値観に挑戦するように召されている。障害者も共に生きる社会こそ健全な社会である。障害を持たない人々も、そのような社会でこそ、互いに人間としての基本的な価値によって受け容れ合うことができるのである。このことを教会は自らの在り方において社会にはっきりと示さなければならない。

## 6. まとめ

筆者が基本的視点としている福祉の核心と本質は、「一人も見捨てない・切り捨てない」点にある。またこのことが、いわば絆の働きを果たし神の家族とも云うべき「共同体（社会）の連帯性」を構築すると考えている。

問題は私たちが、どんなに良心的で博愛主義や人道主義の限りを尽くしても罪人としての人間の限界を持つ限り、この福祉の核心と本質の論理を明確に提示することは、至難の業といわざるを得ない点にある。あわせて、ここでは皆が共通の地点に立てる視点が必要と考えている。筆者が、副題で掲げた福音の神学の視点はこのことを意味している。

そして筆者は現在、前記の「他人を救ったが自分自身を救うことができない」（マルコ 15：31）弱さをご自身のものとされた十字架のイエスに、その視点を見出している。つまり、その最大の根拠は、人間たちの最大の弱さと悲慘とどん底を神自らが引き受けられた所に見ているのである。この意味において初めて、福祉の共通基盤が据えられると考えている。あわせて、共生の世界が拓かれるのである。

筆者によるこの間の神学的論理は、おおよそ次にある。

まず第一に、天地万物の創造者である神が、被造物であり神に背反した人間との共生を願われ、私たちを再び神の子として回復するために、独り子イエスキリストにおいて人間の姿をとられた点にある。このことは、神の愛の御意志を示しており、あわせて天の高みに留まりつづけることなく、人間の地平にまで降り人間の苦難や喜怒哀楽を共有することを意味しているのである。しかも、家畜小屋において生まれ、飼葉桶で受けとめられた救い主の姿は、最もつましくひ弱でどん底の世界を引き受け共有することを示している。つまり、福祉を支える根拠がここにあるのである。

第二に、救い主イエスキリストが十字架による贖いを成就した点にある。十字架刑を引き受けられたことの理由と意義は、次のように考えられる。旧約の意味においては、すべてのものがキリストとともに律法の呪いに対して死んだことを示している(申命記 21:22・23, 「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけねばならない。木にかけられた死体は、神に呪われたものだからである。』)。新約の意味においては、社会的な事情では、福音宣教における旧来の律法主義を破壊する神の国の教えが反体制の危険思想と見られ、今流に言えば国家反逆罪の危険人物とされたのである。一方、神学的な視点では、キリストが自らを神の子と呼んだことが挙げられる(ヨハネ福音書 10:33~36, ユダヤ人たちは答えた。「善い業のことで、石で打ち殺すのではない。神を冒瀆したからだ。あなたは、人間なのに、自分を神としているからだ。」父から聖なる者とされて世に遣わされたわたしが、『わたしは神の子である』と言ったからとて、どうして『神を冒瀆している』と言うのか。)。また、壮大なユダヤ神殿の崩壊を予言し、ご自身の復活による真の神殿の到来を予告することで神殿冒瀆罪に問われたことが挙げられる(マルコ 14:58~64, 「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました。」重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。イエスは言われた。「そ

うです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。」諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。)

第三に、イエスの当時は十字架の死は奴隷に対する刑であって、より残忍な方法として釘で打ちつけ、本質的には恥辱と憎悪を意味したのである（ガラテヤ 3：13、キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださいました。「木にかけられた者は皆呪われている」と書いてあるからです。)

以上をふまえるとき、福祉の基盤となる福音の神学の視点は、どう据えられるのであろうか。その核心は、染みも傷も無い神の小羊であるイエスが、苦難の極みである十字架刑を罪人のわたくしたちの身代わりとなって引き受け、そのことで神との和解を成就した所にある。全知全能の創造主なる神ご自身が、その独り子イエスキリストにおいて、苦難と悲惨の極みである十字架刑を引き受けられたのである。この世の苦難と悲惨が、われわれを押しつぶすとき、その苦難と悲惨を神が既に共に背負われている福音の神学を、ここに見るのである。

すると、小聖書と呼ばれる「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネ福音書 3：16) の聖句も、福祉の視点から「一人も見捨てない・切り捨てない」との意義を包含すると考えられるのである。あわせて、「迷い出た羊のたとえ」(マタイ 18：12～14)の聖句においても、その一匹を含む百匹全体が尊重されることで神の家族の世界が描かれていると考えている。

### おわりに

以上により、常日頃の関心事を短時間であったが纏めてみた。事柄の性質上文献の引用が多くなったが論旨に則して精選し、まとめについては多年の自分なりの考察を論理化した。その意味でひとまず標題についての論考は試みたと考えている。ただ、福祉の生命線は、共同体の構築にあると考えており、この点はまだその緒についたばかりと考えている。この点での更なる考察を今後の課題にしたい。

## 参考文献

- ・ジャン・パニエ（佐藤仁彦訳）『ラルシュのこころ』一麦出版社，2001.
- ・ジャン・パニエ（小塩トシ子・長沢道子訳）『ひとつとなるために』日本基督教団出版局，1998.
- ・ジャン・パニエ（伊従信子訳）『共同体—ゆるしと祭りの場』女子パウロ会，1987.
- ・ジャン・パニエ（長沢巖・矢口以文訳）『希望にあふれて』日本基督教団出版局，1976.
- ・ベッキー・ベネネイト編（アンセルモ・マタイス，奥谷俊介訳）『マザー・テレサ 愛のこころ 最後の祈り』主婦の友社，平成十年.
- ・キャサリン・スピנק（新島典子訳）『マザー・テレサ』近代文芸社，1997.
- ・マザー・テレサ〈ホセ・ルイス・ゴンザレス・バラド編〉（渡辺和子訳）『マザー・テレサ 愛と祈りのことば』PHP 研究所，1997.
- ・石居正巳・熊澤義宣監修『社会福祉と聖書 福祉の心を生きる』リトン，1998.
- ・宮嶋真一郎『共働学舎の構想』共働学舎東京事務所，1998.
- ・今関公雄『ペーテルのキリスト教福祉—ナチ安楽死作戦への抵抗と福祉実践展開—』青山学院女子短期大学紀要第 51 輯，1997.
- ・今関公雄『福祉の豊かさの一考察—A 施設反対運動の遺産として—』青山学院女子短期大学紀要 58 輯，2004.